献 呈 の 辞

木々のつぼみも膨らみ，いよいよ春めいてまいりました。今年度は新型コロナウイルスの感染拡大の影響が社会のさまざまなことに及びました。大学も少なからずその影響を受け，教育や研究のあり方を考え直す機会にもなりました。まだ収束したとはいえない，なんとも落ち着かない状況の中ではありますが，今年も退職される先生方をお送りする季節となりました。

専修大学文学部では，2021年３月末日をもって英語英米文学科の坂野明子教授と松下知紀教授，歴史学科の大谷正教授と樋口映美教授の４人の先生方が，定年を迎えて退職されます。

坂野明子先生はお茶の水女子大学文教育学部を卒業されたのち，お茶の水女子大学大学院人文科学研究科修士課程および東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程に進学され，アメリカ文学の研究を続けられました。その後，静岡大学教育学部で教鞭をとられたのち，1995年に専修大学文学部に着任されました。在職年数は26年になります。その間，英語英米文学科長，図書館長をはじめ，学内の種々の委員を務められました。

坂野先生は英語圏の文学，特にアメリカ文学がご専門で，ヘミングウェイやアメリカのユダヤ系作家の研究分野で多数の論文を発表してこられました。多くの普及書の出版にも参加されています。図書館長として発信された文書は，いずれも図書館に通いながら思索を深める

ことの幸福感がにじみ出てくるような文章で，その喜びが学生たちの心にも染み込むように伝わったことと思います。

松下知紀先生は静岡大学教育学部を卒業されたのち，東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程および東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程に進学され，英文学の研究を続けられました。その後，岐阜大学教養部で教鞭をとられたのち，1986年に専修大学文学部に着任されました。在職年数は35年になります。

松下先生のご専門は中世英文学で，特に英語音韻論や英語史の分野で国際的に研究活動を展開され，英語による著書も含めて多数の論文や著書を発表してこられました。文部科学省オープンリサーチセンター整備事業のプロジェクト「Anglo-Saxon 語の継承と変容」では代表者としてプロジェクトを牽引し，シンポジウムや公開講座を実施するとともに，文学部の若手研究者の育成に尽力されました。図書館などでは，たくさんの本を抱えて研究に邁進されるお姿をよくお見かけしました。

大谷正先生は大阪大学文学部を卒業されたのち，大阪大学大学院文学研究科に進学され，日本史の研究を深められました。その後，大阪大学文学部や教養部に勤められたのち，1982年に専修大学法学部に入職され，2010年からは文学部に所属されています。在職年数は40年になりますが，その間に教養教務委員長として教養教育の運営や充実化に尽力されたほか，学内の多数の委員を務めてこられました。

大谷先生のご専門は日本近代史で，特にメディア史の分野を中心に多数の論文と著書を発表してこられました。また，東アジア近代史学会では理事や事務局長などの役員を務めるなど，学界において多面的

に貢献されてきました。学生や社会に対する研究成果の還元にも力を注がれ，最近では日清戦争の実像を独自の視点で描いた新書を出版され，多くの全国紙・雑誌に紹介されるなど好評を博しました。

樋口映美先生は東京女子大学文理学部を卒業されたのち，成蹊大学大学院文学研究科修士課程およびノースカロライナ大学大学院歴史学研究科博士課程に進学され，アメリカ史の研究を続けられました。その後，ノースカロライナ大学や共立女子大学国際文化学部の教壇に立たれたのち，2003年に専修大学文学部に着任されました。在職年数は18年になりますが，その間に歴史学科長をはじめ学内の種々の委員を務められました。

樋口先生はアメリカの人種関係史や社会史の研究がご専門で，学会誌等に論文発表をされる傍ら，多数の著書を出版されてこられました。アメリカ学会では評議員や常務理事を歴任し，アメリカ史学会では運営委員の代表や編集代表を務められるなど，学界での貢献は多大なものです。学内では高校教員対象研修プログラムの実行委員長を勤められ，全国の高等学校との連携や交流の機会を充実・発展させることにも力を注いで下さいました。

専修大学文学部の発展に大きく寄与された 4 人の先生方に対して惜別の思いは尽きませんが，今後のますますのご健勝を願いつつ，心からの感謝の気持ちとともに献呈の辞とさせていただきます。

2021年 3 月

専修大学文学部長　高　岡　貞　夫